



雨水利用を進める全国市民の会

会長 辰濃 和男

〒131-0032 東京都墨田区東向島1-8-1

TEL: 03-3611-0573

FAX: 03-3611-0574

H. P.: <http://www.network.sumida.tokyo.jp/amamizu/>

雨水利用国際協力の態勢づくり進む

「市民の会」 バングラディシュ・中国へ6人派遣

世界の都市、なかでもアジアの大都市では、どこも都市型洪水の問題に直面しています。今後、都市化がさらに進むと、事態は一層深刻化するに違いありません。また2025年頃には、世界の人口の3分の2近くが都市に住むと予想されています。その大部分はアジアです。都市への過度な人口の集中と水の大量消費は水不足を招き、地域によっては水戦争すら心配されています。

今年の6月、国連環境計画 (UNEP) が都市の雨水利用を取り上げたように、今、都市の雨水利用が、渇水と洪水を総合的に解決する有効な手段として世界から注目されています。これまでの日本における、雨と断絶してきた都市の教訓とその雨水利用の取り組みの成果を世界の都市に伝えていくことは、世界の都市が持続的発展をなしとげていくために、重要な意義を持っているように思います。また先般の「雨水の日」に行われた「アジアセミナー」では、安全な飲み水の水源としての雨水の有効性が話題にのぼりました。私たちが開発した雨水利

用の技術がこうしたニーズに少しでも応えていたらどんなに素晴らしいでしょう。ともあれ、今、私たちの活動も、足元からの雨水利用の国際貢献という新たな段階を迎えようとしています。

雨水利用を進める全国市民の会は、これまでも、世界各地にでかけ、雨水利用のネットワークを着実に広げてきましたが、これからは、そのネットワークを活かしながら、雨水利用の国際協力態勢づくりに向けた新たな取り組みが求められているのではないのでしょうか。私たちが目指す、国際雨水センターもその延長線上にあるように思います。



このような観点から、雨水利用を進める全国市民の会では、地球環境基金の支援を受け、9月17日(金)から26日(日)にかけて、まず、中国とバングラディシュに代表団、村瀬、山本、今関、人見、松本、小沢の6人(団長・村瀬事務局長)を派遣しました。ねらいはアジアでの雨水利用の国際協力態勢づくりのためです。数多くの成果を期待したいと思います。

—いのちを救う雨水利用—

8/7 国際協力・雨水利用アジアセミナー

報 告

◆ 代表幹事 山本 耕平

8月7日(土)の午後に墨田区役所の会議室をお借りして、「雨水の日」(8月6日)記念イベントとして「国際協力・雨水利用アジアセミナー」を開催しました。当日受付のみ、という方法をとったため、何人集まってくれるかが心配でしたが、会員以外も含めて約180人の参加があり、会場はいっぱいになりました。

海外からは、台湾工業技術院能源興資源研究所の李士 畦さんが来日、台湾の雨水利用の現状について報告していただきました。

台湾では、20年以上前から雨水利用に取り組んでいるということで、最近では、台北市立動物園に、建物の屋根を利用した施設(集水面積5000㎡、貯水タンク500t、トイレや草木の灌水に利用)、地表集水(集水面積10000㎡、貯水タンク250t草木の灌水、動物池に利用)などを導入しています。この施設の設計にあたっては、村瀬事務局長や会員で建築家の佐藤清氏らがアドバイスをしています。

面白いのは、大きなタンクは地下にあって見えないために、啓発用に園内各所に「雨水貯金箱」をおいて、雨水貯留の状態が見えるようにした、というアイデア。

その他、学校、病院など、さまざまなケースが報告されました。特筆すべきは、今年から全国的に「雨水建築士」の養成をはじめたということで、日本より一歩進んだ取り組みがスタートしているようです。

次に、バングラデシュの地下水ヒ素汚染について、宮崎に本部のある「アジアヒ素ネットワーク」で活動している、建築家の安部良氏から報告がありました。

インドやバングラデシュのベンガル地方では、飲料水を地下水に頼っていますが、土壤に含

まれるヒ素による中毒が深刻な問題になっています。インドでは22万人もの患者がいると推定されているほか、バングラデシュでは人口の半数近い4000万人もの人たちがヒ素汚染中毒の危険にさらされており、6000人の患者が確認されています。

安部さんは、シャムタ村という農村で、飲み水確保のための活動をしています。彼が発案したのは、広場に四本の柱を立て、サリーをテントの屋根のようにして雨水を集めるという方法。雨期には島ようになってしまうという土地ながら、これまでは雨水利用がほとんど行われておらず、ヒ素汚染された地下水に依存していたということです。

市民の会では、安部さんの話に動かされ、9月にバングラデシュへ調査団を出すことにしました。(調査団はすでに9月26日に帰国。具体的な協力の方策を検討しています。)

その他、市民の会の中臣昌広氏、柴早苗氏から、「ペルーにおけるフォグキャッチメント」(霧をつかまえる技術)、「ブラジルのI.R.P.A.(NPO)の、雨水利用の取り組みと国際協力」について、それぞれ報告がありました。6月の南米調査の報告です。

会場では、バングラデシュの実情を知らせる写真展や、市民の会メンバーの開発した製品、安部氏の、サリーによる雨水集水の実演などの展示も行いました。また、バングラデシュから日本にきている研究者や留学生も参加したほか、発展途上国のテレビ制作研修生のチームが取材し、期せずして国際色豊かなセミナーとなりました。閉会後は、例によって「いながき」で交流会。焼き鳥を囲んだ国際交流の楽しいひとときをすごしました。

なお、このセミナーは財団法人イオングループ環境財団の助成金を活用しました。



雨と杉に感激

鹿児島・屋久島雨水調査

情報部会

■ 小川 幸正

調査隊12名で、8月27日～29日に行ってきた。取りまとめ役を市川龍さんがしてくれました。

最初に鹿児島市へ入り、市役所で河川港湾課並びに雨水利用をされている3名の市民の方との意見交換がありました。鹿児島市では、治水面から、個人住宅に雨水貯留施設等を設置する際に助成金を交付しています。平成9・10年年度に申請された件数は、107件あります。市民の方は、天水尊を使われている竹之内氏と福倉ご夫妻が、参加してくれました。話の中心は、鹿児島名物の桜島からの灰について。灰が降った際には雨水タンクの清掃が大変との意見がありました。確かに、市内のあちらこちらに、細かい黒っぽい灰が地面にみられました。

鹿児島市内の雨水利用の施設を見学しました。鹿児島県庁は、平成8年にオープンした18階建ての豪華な建物で、屋根から集水し、冷却水や散水に使用しています。18階の展望ロビーからは、対岸の桜島・御岳が良く見え、すばらしい景観でした。個人住宅では、米倉邸と野崎邸を訪問しました。米倉邸では、屋上庭園の散水用に天水尊を2基設置し、雨水利用していま

す。野崎邸は、500リッターの樹脂タンクを4基連結させて雨水タンクとし、トイレや散水に使用しています。なお、夜は鹿児島市環境保全課との懇親会がありました。

屋久島では、環境文化研修センターに宿泊し、研修を受けながら屋久島の自然に触れることができました。有名な「屋久杉」は、樹齢が千年を超えた杉のみがそう呼ばれます。標高1000mにある屋久杉ランドでは、自然林の中を散策することができました。屋久島は、年間降水量が最高で10,000mmにもなります。この多雨があって、初めて屋久杉がゆっくりと成長することができます。何千年という長い時間をかけて生き続けている自然林は、今後もそのまま生きてほしいという気持ちになります。



屋久島はまたゼロエミッションを推進していることでも有名で、その中で生ごみや魚のアラなどを堆肥化する「地力センター」も見学してきました。

以上、簡単に調査の一部を紹介しましたが、他にも多くの資料を持ち帰っています。お問い合わせがありましたら、事務局へお願いします。

屋久島の水こぼれ話

◆ 高橋 朝子

土地の人は山へゆくのに水筒を持たない。あちこちから吹き出す湧き水はとてもおいしい。小さな島に降った雨は、140の川（雨の時のみできる川を入れると200）から、一気に海に向かって流れる。

島の南西部にある、「大川（おおご）の滝」は、ドドーッと落差88m。滝口幅は5m、滝の周囲30m。圧巻である。飛沫がかかって、

ぼんやりと虹が見える。絶え間なく流れる大量の水は、2・3日前に降った雨なのだ。屋久島は、水の循環が体感できる島でもある。

屋久杉自然館の日下田館長のお宅では水道もあるが、裏山の湧き水をホースで引いて生活用水に使っている。最近、東京へ行った娘さんは、幼い頃からの習慣で、洗濯機の水は一日中流しっぱなしとっていて、大失敗したそうな。

ペルー & ブラジル

雨水調査に参加して

■ 広報委員 宮村 昌幸

6月26日～7月11日にかけての約2週間、私たち一行6名は南米ペルーとブラジルの雨水調査に旅立った。調査の目的は3つ。

- ①ペルー海岸沿いの水捕獲システム（通称フォグキャッチメント）の調査
- ②ブラジルで開かれる雨水国際学会に参加して国際交流を深める
- ③ブラジルのNGOによる雨水施設の調査

特に、ペルーのフォグキャッチメントが興味深かった。ペルー海岸沿いは、湿度が高いのに雨が降らない（年間降水量2～5mm）。にもかかわらず、山すそでは年中霧が発生している（南太平洋フンボルト海流の影響）。簡単に装置を説明すると、標高100～300mの山尾根の鞍部に合成布を据え付ける。発生した霧がここを通過して結露するので、その水を容器に溜めるといふもの。

気象条件と設置場所により水の量は変わるものの、幅50m、高さ2.5mの装置で一日3m³程度は確保できるとのこと。国道の防砂林や国立公園の緑化、貧困地区の生活水などに利用されている。

問題なのは維持管理で、風による損傷や、場所によっては強奪されるといった事例もある。設置までは国際援助でやれても、その後をどうするかが課題となっている。現地で説明していただいた国立農業大学のピンチュ先生、なんととも寂しそうな表情が印象的であった。

さて、ペルーと言えば、だれでもインカ帝国の遺跡を思い浮かべることでしょ。リマ市郊外のパチャカマ遺跡（A.D.600～800年頃中央海岸地帯）と有名なナスカ（A.D.500～800年頃南部海岸地帯）の地上絵を見学した。地上絵は、20人乗りのセスナによる1時間の遊覧飛行であった。パイロットの過剰なサービスで左右に旋回飛行するため、3人がギブアップ。結局、後から絵はがきと写真を見て、地上絵を確かめるといふ一幕もあった。

ペルー・ブラジルの「食」 中臣 昌広

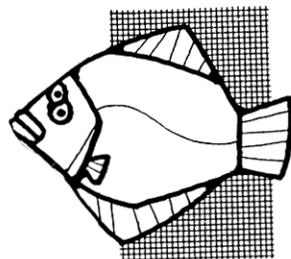
ペルーの首都・リマ市郊外のパチャカマ遺跡を訪れたとき、屋外売店で注文してすぐに焼いてくれた牛肉とじゃがいもが、素朴な味でおいしく感じました。国民的な飲み物である透明黄色のインカコーラを合わせると、「気分はペルーの人」に近づきます。

ペルーでは、魚介類の料理をレストランで味わうことができます。タコ、イカ、貝類などが入ったマリネ風サラダは、さっぱりして口に合います。

ブラジルの代表的なものはシュラスコ料理でしょう。レストランの店員は、肉が刺さった1メートルくらいある鉄串を持って、希望するテーブルに分けていきます。豚、牛、ヒツジ、ヤギ、鳥……。

ブラジルでは、肉類、豆類、米が主食ですが、野菜、果物もふんだんに食卓に並びます。

昼食は、すぐに食べられるセルフ・サービスのレストランが流行っています。ここでは、皿に乗せた料理の重さで値段が決まります。



雨水利用自治体担当者連絡会 8/20 開かれる

平成8年に設立した「自治体連絡会」には、現在91の自治体が加入しています。今年の総会は、8月20日（金）、墨田区役所で、北は山形市から南は沖縄県まで、52自治体から84名の参加を得て開催されました。

国も初めて総会に参加

日本各地の水事情が異なるため、雨水利用の力点は、節水・防災・洪水・環境対策など、地域によって異なります。雨水利用への取り組みや関心もさまざまで、5団体から興味深い事例発表がありました。また、雨水利用の推進には、国の協力が不可欠で、

今年は総会に講師として、初めて建設省に参加していただきました。

今後の連絡会

昨年墨田区で開かれた「雨水利用自治体・市民フォーラム」では、「国際貢献」と「啓発・交流・機構整備」の必要性が提起されました。それを受けて「連絡会」が、全国各地の雨水利用の取り組みを紹介し、ノウハウや経験の交流をしていくことは、変わらぬ課題であります。

墨田区は代表幹事団体として、今後とも多くの自治体や国をも巻き込んで、雨水利用を社会の仕組みにしていくよう、事業を展開して行きたいと思いません。

（墨田区環境保全課・酒井）

◆雲と雨のことワカッタヨ

雨水探検隊例会、平沼洋司さんを招いて

8月22日のことです。13人の子供たちと大人6人が夏休みの外出小学校の屋上に立ちました。画用紙に雲をスケッチ。ちょうど夏と秋の、雲が交代する時期です。よく見たので教室に戻ってからの雲の話、楽しく聞くことができました。ピーカーの中の、雨つぶの形の写真も面白かった。

8ミリの洪水の映像は、生々しくて食い入るように見ました。

◆宅地造成の段階で、雨水利用システムを採用—自治体、企業と協力

千葉県八千代市の宅地造成地に、洪水にも濁水にも効果的な、雨水利用のシステムが採用されることになり、現在、工事を進めている。

開発したのはエンライト・コーポレーション（TEL・047-483-7088）。全16戸の、各家の駐車場の下に、大型の雨水貯留タンクを設置し、トイレ用水や散水などに利用する。雨水タンクは、容量7トン。屋根に降った雨を集め、常に3トンだけがたまる仕組みになっている。また、大雨の時には、タンクの残りの部分でさらに3.5トンほどが貯留でき、オーバーフローした雨は、浸透する貯留槽へと導かれるので、洪水の対策としても大きな効果を発揮する。

改めて雨水タンクを設置するのは大変だが、雨水の流出量が大幅に増える宅地造成を計画する際には、最初から「指導」というかたちで積極的に進めてもらえることを、今後の行政に期待したい。



◆今年もやります、「2000年雨暦」

現在制作中

毎年の恒例となった雨暦の制作が、現在進められています。雨予想のアタリ・ハズレを記入するチェックシート付きというのが、今回の大きな特徴です。

また、台湾の動物園での雨水利用の写真や、募集した雨の写真コンテストの入選作品も登場します。10月末には完成する予定なので、ご期待下さい。

◆都市の洪水調査に行きませんか

地下鉄や地下街に雨水が流れ込む災害がこのところ目立っています。都市型洪水は、国技館に雨水利用を勧めるにいたった、雨水利用運動の原点といえる課題です。先日、一人の尊い命が

奪われた、東京・落合の現場へ、とにかく調査に行こうと、企画が進められています。

具体的な日程は改めてご連絡します。その節は、ぜひ一緒にまいりましょう。

◆「すみだまつり」で 雨水利用を宣伝—「全国市民の会」

10月2・3の両日に墨田区錦糸公園で開催されたすみだまつり。「全国市民の会」も雨水利用の宣伝で、参加しました。大変な人込みで、かなりの手応えを感じたそうです。安藤さん、磯村さん、伊藤（林）さん、田中清子さん、高原さん、徳永さん、松本真理子さん、村瀬さん、お暑い中を、ごろうさまでした。

追悼

伊礼 弘さん逝去

沖縄県雨水利用を進める市民の会の事務局長、そして「全国市民の会」の幹事として、共に未来を見つめ、活動してきた伊礼さんは、去る8月10日、一人で旅立たれました。持病のC型肝炎のため6月20日に入院。8月に入って病状が急変したとのこと。54歳でした。心から「さようなら」を、そして「ありがとう！」を申し上げます。

伊礼さん

沖縄県雨水利用を進める市民の会

◆ 会長 吉田 朝啓

「カンボジア沖縄友好の会」の会長として、カンボジア現地での公衆衛生問題をどうするかと、四苦八苦していた頃、マスコミでそのことを知ってか、沖縄本島中部の青年たちが提携を呼びかけてきた。「中部管工事業協同組合」の青年部の面々である。組合の創立記念の事業として、カンボジアの水事情を改善するために、いささかでも情報と技術を提供しようと、「カンボジアに心の水を送る会」を結成して応援をしてくれた。

*

これとは別に、沖縄市では、水道局を中心に雨水を活用するためのいろいろな啓蒙活動や実践が繰り返されていた。ちょうど、私が県の衛生研究所所長、県公衆衛生協会役員、などを兼ねていたこともあり、沖縄市を中軸とした「雨水利用を進める市民の会」ができて、その初代会長に据えられることにもなった。

*

このような一連の活動は、地下水のように脈々と流れる中部地区の人々の心意気によるものと薄々は感じていたが、その後、親しく交流を深めていくに従って、中部に「伊礼という人物」がいるということと、いろいろな建設的な動きの中で、常に彼が支えになって企画し実践し、リードしているという事実気がついた。

*

伊礼弘。控えめなチョビ鬚、クリクリした澄んだ瞳、やさしい目尻、決して大声を出さない丸やかな人柄。彼は上司と同僚に恵まれ、いよいよこれから沖縄本島中部地区や沖縄市だけでなく、県全体の「水の在り方を考える思想の総本山」の守り手として、存分の活躍をしてもらいたいと、みんなが期待していた矢先である。

*

突然の訃報に、頭の中が真っ白になってしまった。

沖縄でいう「玉みじ（雨水）」が、胸の中から突然大量に抜け出たような虚脱感である。

*

畏友伊礼弘が残したものは大きく幅も広い。大きな水の栓はようやく開けられたばかりだがこれから彼がやり残した分を、みんなが受け継いで、彼の初心を全うしてあげなければならない。

*

「遠くのダムより軒の雨」という共通の合い言葉を大事にして、彼のこれまでの労に報いたい。

<合掌>

伊礼弘さんを悼む

雨水利用を進める全国市民の会

◆会長 辰濃 和男

初めて伊礼さんにお会いしたのは三年前の秋だった。沖縄で雨水フェアを開く話が具体化していたときだ。県知事の支援を得られるかどうかが緊急課題で、伊礼さんと彼の上司、仲宗根健昌さんとは沖縄タイムスの社長室で会った。いまなぜ、雨水フェアを沖縄でやるべきなのか、伊礼さんは大演説をされた。その熱っぽい言葉をじっと聞いていたタイムスの豊平社長がいった。「やりましょう。社をあげて協力しますよ」。豊平さんは、県庁内での大田知事との話合いにも同席してくださった。知事が「いいことです。本来、県が主唱してやるべきことです。支援します」としてくれたときの、伊礼さんのくしゃくしゃの笑顔を私は忘れない。

いつも沖縄の方々から学ぶのは「情（なさき）の世界」のことなのだが、伊礼さんからは特にそのことを学んだ。一緒に雨水フェアの仕事をして、仕事のすみずみにまで伊礼さんの情がしみこんでいることを何回、痛感したことだろう。フェアが終わってからも、伊礼さんのことを思い出すたびに胸にあったかいものが流れこんでくるのを私は感じていた。

*

私よりもはるかに若い伊礼さんが旅立ってしまったこと、無二の心友を失ってしまったことを、いまも信じたくない。伊礼さんが楽しみに打っていた琉球太鼓の響きが私の心から消え去らない。

◆◇■☆▼*※♪◇§◆◇☆*■※♪◇▼§

「雨の事典」——読者に何を伝えるか？

■制作チーム 長尾 愛一郎

「雨の事典」制作チームは、このところ、グループで、あるいは個人で積極的に取材に出かけています。「市民の会」が主催したブラジル・ペルー視察や鹿児島・屋久島調査だけでなく、新潟の棚田では田植えをし、奈良県で開かれたおかみサミット（おかみとは雨を司る神です）に参加し、その際には足を延ばして、奈良盆地で水不足に悩んだ、江戸時代の農民の記録を復刻した研究者を訪ねました。

鳥海山山麓の町で開かれた「湧水保全フォーラム」では、鳥海山の山頂附近の年間降水量が推定で2万ミリ近くになるとの話に驚きました。香川県の仁尾町の雨乞い龍まつり、東京のまん中に残る水止舞などの見学。さらに、他の市民団体が主催した見学会「川にはかつて神がおわした」に参加して、東京の神田川沿い

の水神社や水稲荷神社を訪ねました。そのほか、日本在住のインドネシアの方や、韓国事情に詳しい方からも取材しています。

一方、雨の森に迷い込んで事典の全体像を見失わないように注意しています。例えば、水のテーマに引っ張られすぎるあまり雨の視点が不鮮明にならないようにしましょう。雨を拒否する姿勢から、雨を受け入れ愉しむ考え方への転換を強調しよう。先住民の人たちの自然理解から学ぼう。生き物の目線で考える姿勢を大切にしよう。地球規模で雨の循環を考えよう…などと話し合っています。読者に何を伝えるか、取材、原稿執筆とともにさらに議論していきます。

皆さんのご意見をお聞かせください。雨の話題などありましたらぜひお知らせください。

電話で 三郎さん



谷津干潟を再生した
森田三郎さん

千葉県議会議員
「市民の会」会員

悪ガキ。それが、少年時代の森田さんを表わす、一番簡潔な言葉だろう。

お寺の和尚さんには、よく追いかけられた。お墓のお供物でママゴトをしたり、卒塔婆を抜いて、木の上にターザン小屋を「建設」したり、イタズラばかりしていたから。

「花を活ける竹筒や線香もシッケイしたね」「なぜ?」「竹筒に線香をびっしり詰めて、煙を流しながら走るの。聖火ランナー。メルボリンオリンピックのニュース映画見てサ」

広大な谷津干潟は、習志野市の自宅と目と鼻の先にあった。毎日のように、友達と日暮れまで遊んだ。

当時は皆、貧しかった。森田少年も小学校4年から、家計の足しに新聞配達を続けた。親思いの頑張り屋でもあったのだ。

1974年の暮。そのころ市川市に住んでいた29歳の森田さんは、10年ぶりに谷津干潟に立った。湾岸道路の建設に反対する人たちが「干潟を守ろう」と声を上げていると

いう、新聞記事に背を押されるようにして。

かつて水平線の見えた海は、見渡す限り埋立地が変わっていた。国が所有する、50ヘクタールだけが、見えない海と2本の水路で繋がれて残っていた。ここも埋立て予定地で、高さ4mの堤防すれすれまで、粗大ゴミや家庭ゴミなどが山をなしていた。分厚いヘドロが滞積し、その中でも重なりあうゴミだ。森田さんがゴミをかき分けると、小さな葎の芽が顔を見せた。

それから10数年間。仕事の合間に、主に一人で、指紋が消えるほど熱心に、ゴミを片づけ続け、市や県と闘い続けた。やがて、この小さな谷津干潟は、生物のゆりかごとして、野鳥たちの楽園としてよみがえった。

1988年、国の鳥獣保護区に、93年、国際ラムサール条約登録地に指定された。

悪ガキだった人こそ、往々にしてりっぱな仕事をするとと言われる。和尚さんも、空の上できつと目を細めているに違いない。(い)

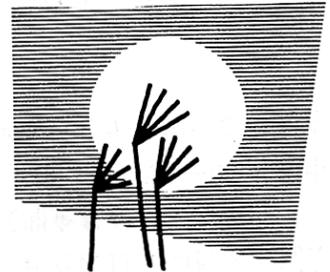
事務局だより

田中 清子

◆故 伊礼 弘さんは、とても几帳面な方でした。幹事会の通知を発送すると、委任状の提出を一度も欠かしたことがありませんでした。遠い沖縄から東京の幹事会へ出席されるのは無理というのを承知で、特別幹事をお願いしていたのです。委任状を返送するという行為を通して、伊礼さんは私たちに無言のメッセージを伝えて下さっていたのではないのでしょうか。お目にかかった機会はわずかであったにもかかわらず、事務局一同にとって、伊礼さんの存在はかけがえのないものでした。心からご冥福をお祈り申し上げます。

◆しぶとい今年の残暑でしたが、季節はようやく収穫の秋を迎えています。去る9月中旬、新潟県吉川町へ稲刈りに行って来ました。日本海をのぞむ尾神岳の山麓に広がる棚田。ズッシリと実った稲の株を握りしめてザクッと鎌を入れる時の手応えは至福の瞬間です。腰をのばしては流れる汗をぬぐって進める作業。ひさしぶりに充実した秋の午後でした。

実は、この吉川町の棚田の風景は2000年版雨暦の巻頭を飾ることになります。全国各地の美しい棚田の写真は枚挙にいとまはありませんが、私たちが棚田のオーナーになって訪ねた吉川町の一枚が選ばれることになるとは、予想外のことでした。まもなく発売される2000年版雨暦、どうぞご期待下さい。



編集後記

7月5日に「あまみず号外」を出して以来の会報です。その間、ペルー・ブラジル雨水調査、アジアセミナー、鹿児島・屋久島調査などがありました。

もっとささやかだけれど、大事な歩みも、たくさんあったと思います。そうした皆さんの動きをどれだけお伝えできているでしょうか。どうか、事務局宛にお便りを下さいますよう、お願いいたします。近況などでも結構です。

3回連載予定の「小型雨水タンクへの助成制度」最終回は、紙面の都合で次号に回させていただきます。

編集長 糸賀幸子